
とある不幸な少女の幸せな日常

トリ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある不幸な少女の幸せな日常

【Nコード】

N0020W

【作者名】

トリ子

【あらすじ】

魔物に餌として異世界トリップした少女が、言葉を覚え、魔法使いに師事して、異世界で暮らしていく。

戦いシーンは今のところありません。

基本ほのぼの。そのうち、魔法使いとの恋愛模様に移行する予定です…。

とある不幸な少女の幸せな日常1（前書き）

こんにちは。初めて書いた小説です。読みにくいところもありますが、よろしく願います。

とある不幸な少女の幸せな日常1

雪原に散った赤はまるで花のように雪を彩り、月は青く、あたりを照らす。

呆然と月を見上げていると涙がこぼれた。

知らない土地にひとり。寒くて痛くて苦しい。

寒さのせいかな、怪我のせいかな、朝になる前に自分は死んでしまっただろうと思う。

深々と積もる雪に埋もれ、やけに耳が痛いと感じた。

最後に見た光景が、あまりにも美しいそれだけが

せめてもの救いだと思い、流れる涙をそのままに目を閉じた。

1 .

今日は冷えると思って窓の外を見たら、いつの間にか雪が降っていた。

はらはら散る雪は大きく、この分だと積もるに違いない。

もう冬だ。この世界に来て4度目の冬になってしまった。

ぼうつと外を眺めていると、外のドアをゴンゴンたたく音がした。

「はい。空いてる」

慌てて、まとめていた書類を整えて椅子から立つと、ドアが開いて銀髪の青年が顔をだす。

「レイ。」

「師がお呼びだ。お前の書類も俺が持つからお茶の用意をしてくれ。」

あいかわらず気が付く男である。

でも、あったかい紅茶は師を喜ばせるに違いない。

今朝焼いたフルーツパウンドケーキも持っていこう。

いい出来だったから、きっと喜んでくれる。

くれる…はずだ。

「パウンドケーキ、昨日焼いたの。レイ味見して。」

目の前の男に毒見をさせておこうと、整えた書類を渡して、キッチンに飛び込む。

お湯を火にかけて、パウンドケーキを切る。

一切れとって、レイに渡すと、微妙な顔をされた。

「毒見かよ。」

「大丈夫。多分おいしい。」

パウンドケーキ作りは得意だ。

元の世界でもしよっちゅう作っていた。

本当かよ、といいながらもレイの顔はほころんでいた。
見た目硬派そうな男な割に甘いものが好きなのである。

「甘い」

ペロツと食べて、感想はそれだけか。

幾分むつとしながらレイの縛った髪のをひっぱる。

「いてえな、引つ張るなよ。おいしかったよ。」

素直にそういえばいいのだ。

機嫌を直して紅茶の準備をしにキッチンに戻る。

紅茶も元の世界で好きだった。

異世界に魔族の餌として召喚され、うっかり別の場所に飛ばされた。
中途半端に高い中空に転移の陣が出来、下の木に落下。

死ぬことはなかったが、左腕に木が貫通し、揚句足を折った。

それ以外もところどころ傷ができ、満身創痍で落ちた雪原にいると
ころを、

その一帯をテリトリーにしていた師に拾ってもらった。

おかしな術の気配がしたので、気になってきたのだとか。

ぼろぼろ泣いている私を発見して師は抱きしめて、慰めてくれた。

餌としての召喚のため、還る術などありはしないと知って、落ち込
んで泣く私のために

必死で異世界召喚の術を探してくれている。

弟子のレイが、いつも師と一緒にいるのを羨んで、なんでもするから私も弟子にしてくれと頼みこんで弟子にもらった。

しょうがないね、怪我が治ってからだよ。といって笑って。

その時の私は言葉もわからず、碌にこの世界のこと知らない完全なるお荷物

だったにもかかわらず、師匠のそばにいることを許された。

つまるところ、私は今幸せなのだ。

大好きな師の役に立つことが何よりも嬉しいのだから。

お湯が沸いたらミルクポットを添えて砂糖はソーサーに2つづつ。私の世界は確かに色付いている。

とある不幸な少女の幸せな日常2（前書き）

何気ないひとこまです。なんとなく、2とつけるのははかれるようないひとな...

とある不幸な少女の幸せな日常2

元の世界でも英語は一番苦手だった。

国語は大得意で、毎日英語の先生から特別課題をこなしているのに一向に模試の点数がよくなって首を傾げられたこともある。

つまるところ、他言語習得能力が著しく低いのだ。

要領が悪いともいう。

2

「だから何度言ったら学習するんだ、お前は」

レイの呆れた声が耳に痛い。

「さっきも間違えたばかりだろ。これはこういう構文なんだ。」

「……」

「こら、ペンを投げ出すな。思い出せ！」

やいのやいのと言われるが、どうしても思い出せないのだからしょうがない。

「レイ、休憩したいです」

「あと1ページ読んでからだ」

容赦のない言葉にがくりと肩を落として、目の前の本に向かい合う。

辞書もないこの世界では、レイの教えてくれる言葉や文字が

自分にとってとてもありがたいとわかっているが、中々上達しないのだ。

しかし、文字を覚ええないことには、師の役にも立てない。

魔法も、薬品作りも上達しない。

しょんぼりしながら本とノートに向き合うが中々目当ての構文が見つからない。

「…あと1ページやったら、師にお茶を持っていこう。」

ぱあっと顔を上げると、レイが苦笑した。

「師もそろそろ休憩の時間だ。クッキーを持ってお茶にしよう。」

レイが町でジンジャークッキーと、バタークッキーを買ってきたらしい。

そのクッキーはココナッツのようなサクサクした実が入っていてとてもおいしいのだ。

それに、お茶を持っていくと師がよっぱど忙しくない限り3人でティータイムとなる。

「…早く終わらせる」

「そうしてくれ。」

やる気を出して、ノートをまくり教えてもらった構文を調べる。

目の前に餌をチラつかされたおかげで、いつもの倍は早い時間ですされた宿題を解き終えた。

「いつもこれ位早いもつと…」

「努力します」

「…お前いつもそればっか…」

そうして、早々に紅茶の支度にとりかかる。

甘いクッキーがあるから、ちょっと苦めの茶葉を出そう。

ミルクなしで砂糖。レモンのはちみつ漬けも持っていこう。

朝からこもりっぱなしの師のためにできる数少ないこと。

もつと師のためにできることが増えればいい。

あの人の笑顔をもつと増やすことが出来ればいいのに。

「がんばるよ」

にこにこしながら振り返れば、レイに怪訝な顔をされてしまった。

お茶をトレーに乗せて、クッキーとはちみつ漬けをお皿に乗せて師の部屋まで。

ドアを叩くと返ってくる返事にすら喜びを見出す。

「お茶をお持ちしました」

とある不憫な青年の新しい日常（前書き）

今回は前回よりも長めです。

もうちょっとまとまりのある文章にしたいなあと思いつつ…
レイ視点でのお話です。

とある不憫な青年の新しい日常

ある日突然降ってきた少女はそうして日常をかき乱していく。

1

ガターンという音が隣の部屋から響いたとき、俺と師は新しい術を作るための魔法式を作っているところだった。

思わず、師と顔を見合わせ、どうしようか思案する。

「…休憩にしようか。」

「そうですね…」

二人してふーっと息をつくとふっと笑いあう。

「僕が見てくるよ」

「いえ、私が行ってまいります。」

「怪我してたら大変だ。また泣いているかもしれない。」

そういつて、さっさと立ち上がって隣室に向かう師の後を追いながらため息をつく。

半年ほど前に急に異世界からやってきたという少女を師が拾ってきた。

深夜に血まみれの少女を抱えた師にたたき起こされた時のことは一生忘れないだろう。

師と一緒に夜明けまで傷と骨折の処置を行い、朝になれば熱が出てきた少女の看病を行った。

まったく言葉のわからない少女が混乱して泣きだしては師が必死で慰めていた。

なにせ異世界だ。

言葉も常識も食べ物も違う。

ある程度回復してきたので、食事をとらせようとしたら、こちらの食べ物が合わないのか

しょっちゅう吐いては、また熱を出すの繰り返し。

食べ物を吐き出しては、泣きながらこちらに向かって何度も何度も同じ言葉――

おそらく自国の言葉で謝っていたのだろう――を発していた。

初めに熱を出したとき水分と果物は何とか食べれるようだったので、しばらくは水と果物を与え、

他のものはすこしずつ…師が食事を作れないので俺がひたすら作っていた…

大丈夫そんなものを見極めて少女の体に慣らすように作っていた。

そのころは少女が師にしか心を開かず、俺が行くと泣かれる頻度が高かったので、

食事をさせたりや看病もほとんど師がつきつきで行っていた。

熱もあまりでなくなってきた今でも師そのころの名残が少女に対して大分甘いのである。

少女も師に対して全幅の信頼を置いているのがわかり、師がこうして仕事をしていない時は

鳥の雛のように後をついて回っている。

また、少女はそっかしいようで、動きまわるようになってから歩くたびにしょっちゅう物を落したり、

転んだりしているのだが、そのたびに師はこうしていちいち様子を見に行くのである。

ため息もつきたくなるってもんだ。

師も師でいったん少女の傍に行くとなかなか離れられないもんだから、

研究や、仕事がこのことのところ大変おろそかになっているのだ。

もともとさぼり癖のある師だから、慣れてはいるのだが…。

「サヤ。大丈夫？」

ドアを開けると、奥の本棚が半分倒れ掛かっており、思わず悲鳴が上がる場所だった。

本に埋もれた少女、サヤが本棚が倒れないように右腕で支えており、

思ったより大変な事態だ。

慌てて俺が本棚をもとに立て直し、師がサヤを本の中から救出する。

どうやら、椅子を踏み台にして何か本棚をあさっていたようだが、

バランスを崩して、慌てて本棚につかまり、引っ張ったため本棚ごと倒れてしまったらしい。

なんと世話しない子だ。

「何を、していたの」

師が、怒った顔をしてサヤをに問う。

「ごめんなさい。コトバ、勉強、探す」

多分、言葉を覚えるものを探そうとしていたんだろう。

そのうち本格的に教えようと思い、師と俺でちよつとづつ単語は教えていたのだが、

どうやら、学習意欲が沸いたらしい。

それならそうと言ってくれればいいものを…

「どうして、僕やレイに言わなかったの？」

師も同じことを思ったらしい。

「仕事、邪魔。レイ、サリュ、迷惑。」

（サリュは師の名前だ。）

俺たちの迷惑になるから自分で覚えようとしたってことか。

心意気は買っが、ここにあるのは専門書ばかりで、気楽に読めるよ
うな本はない。

それに、こちらの言葉を幾らも知らないのに一人で覚えようとする

のは

あまりに無謀といえる。

しょぼんとしたサヤに対して同情心は沸くのだが、師はそれでも怒っていた。

「まだ左腕がちゃんと動かないのに…もっとひどい怪我をしたらどうするんだ。」

「かかったら危ない薬がある棚もあるんだよ。」

言いざまは丁寧だが、顔からは表情が消え、目は鋭い。

普段笑顔が多い分こういう時は本気で怖い。

サヤも師の怒りを感じてか、震えながら涙目になっていた。

「コトバ、覚えない。サリュ、覚えない。捨てる…」

使えなくて捨てるなんてこと、師の可愛がりっぷりを見ると

ありえないのだが、それでもかなり特殊な仕事をしているだけに、

ある程度言葉を覚えて、この世界になれたら孤児院に預けるか、

どこか養子にやるかと考えていないこともなかった。

それでも「心配かけてごめんなさい。もうしません。」というサヤの言葉で

師も眼光を和らげ、サヤを抱きしめた。

「捨てないよ。使えないなんて思ってない。言葉もゆっくり覚えればいいんだ。」

師は、サヤの背中をゆっくりさすりながら捨てないよ、ともう一度つぶやいた。

泣きながらサヤは恐らく自国の言葉で何事かつぶやいた後、ありがとう、とつぶやいて

師にしがみ付いた。

そうして、その光景をほほえましく見ている俺はといえば、この本棚の惨状と、

今後の教育係はどうするのか、師の仕事のこともあるから俺が志願すべきか等と

今後のことについて思いを馳せるのだった。

結局、言葉を教えたがる師匠に、サヤ自身が遠慮をして、俺が教えることとなった。

サヤは覚えがいいほうではないが、努力家であるし、素直なので、思ったよりもやりにくくはない。

加えて、仕事がある程度終わっていればサヤとティータイムをするという暗黙の了解ができ、

師が比較的真面目に仕事をするようになったことは俺にとって一番よかったことだろう。

しかし、その後のサヤの「私も弟子になりたい」発言で

また、彼の日常がひっかきまわされていくのはもう少し後の話。

町に行こう 前編（前書き）

今回は長めにしますので、分けます。

町に行こう 前編

とある不幸な少女の幸せな日常

落ちてきた時は一面銀世界だった場所も夏の盛りを迎え、青々とした草が繁っている。

夏の盛りとはいっても基本的に寒い地域なのか夏でもあまり暑くはなく、過ごし易い。

こちらの世界に来てから約9か月程度だった。

過ぎた時間のわりに、覚えたことはあまりに少ない。

せめて家事くらいは、と思ったもののそれもほぼレイにまかせっきりだ。

食事はそもそもまだ私がこちらの食材に慣れておらず、師やレイとは別メニュー。

レイに作る前にまずは食べれるように頑張ろうと励まされてしまった。

掃除は、師の部屋は薬品があるから危険らしい。ぶつかって薬品を倒したら危険だからと

すまなそうに断られ、レイには物の位置にこだわりがあるからとすげなく断られた。

結局できそうな家事は洗濯だけだった。こちらの世界には洗濯機なんてものはないから

タライに水を張って板と石鹸でごしごし洗うのだけどこれが意外と重労働だ。

それでも洗い立ての衣類やタオルのいい匂いや、なにより師の喜んだ顔が嬉しくって、あまり苦にならない。

師の役に立ちたい、と常日頃から思っているのに、できることと言ったらお茶を入れることと、洗濯の二つ！

……自分のスキルのなさにしょんぼりする。

今日はいい天気だったので、シーツを洗おうとレイの部屋に行った。シーツを剥ぎ取っているとレイが手伝ってくれた。木と木の間に紐を張って、盥に井戸から汲んできた水を入れる。いつもはこれだけで多分1時間以上かかっているとおもうけど、今日はレイが手伝ってくれたからあつという間だった。こういう時やっぱり男の人っていいなあって思う。力仕事もできるし、背も高いからいろんなところに手が届く。

水の張った盥にシーツを突っ込んで、板と石鹸でごしごしする。レイと手分けして洗っていると、塔の近くの街に住んでいる女の人たちが野菜や果物を持って来るのが見えた。

レイと師は街に降りて薬草やとても貴重な薬を売ったりあげたりして、

街の人たちはとても助かっているらしい。

だから、たまにこうしておすそ分けを貰えることがある。

……でもきつとそれだけじゃなくて、師とレイはともかっこいいから女の人たちが

顔を見に来たがるのだと思う。

今日は野菜や果物だけでなくクッキーやケーキをもってきた女の人

がいて、頬を染めめながらレイに渡していた。
ちよつともやもやする。

レイはかなり過保護だし、口うるさいけれど、家事が得意だしとても優しい。

見た目もとてもかっこいい。それにお星さまみたいにキラキラした銀髪が肩まで流れていて天の川みたいできれいだし、

夏の空みたいな透き通った深い青もとてもきれいなのだ。

黙っていれば絵本の中の王子様だ。

でも、レイはお菓子をくれた女の人に丁寧にお礼を言っていたけれど、ちつとも嬉しそうじゃなくて、むしろそっけない。

「レイのこと大好きな女の子達いっぱいだね」

称賛のつもりで言ったのに、それを言うときレイは困った顔をした。それを見て女の子達はくすくす笑って帰ってしまった。

「レイ、女の子嫌いなのか？」

「いや……」

女の子達の後ろ姿を見送りながら、レイは遠い目をしていた。

「女は苦手だ。」

言われた言葉にちよつと困ってしまう。

「私も女だよ。」

変えられないことで嫌われてしまうのは悲しい。そう思いながら言うとき、「お前はまだ子供だから」と言われた。

大人になったら嫌われてしまうのだろうか。

この国では男女共に18歳から一人前とみなされるらしい。

そうすると、私が大人になるまであと4年程度しかない。それを言ううちよつと驚いた顔をされた。

…そういえば自分の年を言ったことなかった。

どうやら師もレイも私のことを10歳前後と見ていたようだ。

私はあまり背が高い方ではなかったからしょうがないのだが小学校4年生くらいに見られていたのかと思うと切なくなる。

午後のティータイムのために紅茶を用意していると、茶葉がそろそろきれそうなことに気が付いた。

お茶の時にそのことを話すと、茶葉のストックはしてないらしい。

レイが明後日買い物に行くらしいので、その時にということになった。

「私もいつちやだめ？」

せっかくだし、私もほかにどんな茶葉が置いてあるのかみたい。

言葉も大分覚えてきたので、買い物もしてみたい。

どきどきしながら師とレイを交互に見ると、師はちよつと考えるような素振りをしてレイを見る。

レイはその視線を受けて、ちよつとため息を付くと、首をやれやれというように左右に振った。

「絶対に俺から離れるなよ。買い物している間もじっとしているよ。」

そうして明後日初めてのお買い物が決まった。

街に行くこと自体、師やレイが何か用事があるときに付いて行くだけで、

たまにしかないのですごく楽しみだ。

きれいな花屋さん、おいしいパン屋さんのおい、考えただけでわくわくする。

そうして浮足立った私はいつもよりもさらにミスを連発してレイに呆れられるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0020w/>

とある不幸な少女の幸せな日常

2011年11月8日14時01分発行